廣惠濟急方

中巻

卒暴諸證

外傷之類

廣恵濟急方中巻目錄

搶食風 三十丁 口中にはかに黒色の物腫起るなり

真頭痛 三十二丁 頭大にいたみ手足ひえあがるなり

心腹卒痛 三十三丁 むねはら俄にいたむなり

急黄 三十七丁 俄に總身黄色になる病なり

卒瘂 三十八丁 俄にものいふ事ならぬなり

懸壅垂長 三十九丁 咽のうち俄に腫るなり

指頭卒痛 四十丁 指さき俄にいたむなり

無名腫毒 四十二丁 名も志れざる腫物出来るなり

外傷之類

怪我の類を茲に集む

金創 五十三丁 刄めく怪我せしなり

舌斷 五十九丁 舌をきりたるなり

擦壞 六十丁 すりこハしたるなり

攧撲 六十一丁 うられたるゝ

墮落 高きよりおちたるゝ

壓倒 おしにうたれたるなり

閃挫 ひきくじれたるなり

落馬 むまよりおちたるなり

眼為物傷 六十七丁 つき目うち目なり

眼睛突出 六十八丁 目の玉とび出るなり

廣恵濟急方中巻

法眼侍醫多紀安元丹波元悳編輯
男安長元簡 挍

卒暴諸證 人平居無事にして忽に發る病をここに載す

吐血ハ此證一様ならざれバ療法亦同じからず故に七條にわかち大略を知らしむ

吐瘀血 人忽血を吐其血の色或ハ黯黒或ハ紫黒色あしく或ハ凝て切餡のごとく或ハ豆羹汁のごとくなる者にあり此時に當てハ或ハ煩悶或ハ

身體清涼ならずして氣息微に面白きハかりにて停積結聚し瘀血を吐出せるなり此證ハ血多く出るといへども妨なし然れども一時に多く出れバ元氣接ざる者なれバ療法を施すべし

療法

山漆（根葉をとるに用ゆ圖説後に在り）を自嚼飯の取湯にて送下すべし○又方香附子（藥店にあり）を末となし二匁許童子の小便にて送下を良とす○又方茯苓（藥店にあり）の末に香附子の末一匁許宛を米飲にて

用ゆべし○又方花蕋石（薬店にあり）末にして白湯にて服す○又方生藕擦り絞りて汁を取童便に和く服すべし○又方韭を搗て汁を取り三四盞を服すべし胸中悶といへども後に必ず愈○又方黒豆一合紫蘇一匁水煎服すべし

虚損吐血 其人心はよわく気怯形色憔悴或ハ胸懐鬱然飲食ともに風味なく腹ハ饑ながら食をるをハ不欲[illegible]く且物に驚き易く夜快寐ざれ

等の證さへ無よありて後ニ忽吐血者あり又ハ其以前ニ數度嘔吐乃證或ハ度々泄瀉の證有たる後ニ卒然吐血或ハ下血する者あり是ハ虛損吐血よして血の色鮮紅なるへし

療法 伏龍肝（竈の下正中乃焼土なり極く古きものよし）末となし新汲水の中へ入拌淘汰て後よく澄て其上水ニ蜜を加和匂あハせ服して後粥を啜をよしとす

○又方 百草霜（釜の腹ニ着たる墨なり農家雜草を焚たる墨よし）末と

まし糯米を煮たる取湯にて二匁許を服すべし

良なり○又方飛羅麪 羅の蓋に飛て著たる麪なり 京墨 唐墨の上品を用ゆべし無ときハ和墨 乃よ乾を用ゆべし 也磨汁にて二匁許を服すべし○又方人参焙側栢葉焙 図説後にあり 荊芥穗 薬店にあり 黒焼にして等分何れも末となし飛羅麪少許を入新汲水にて和匂く稀糊の如くして服す

虚熱吐血

患人面赤滑澤甚しく或ハ躁悶或ハ喘

息して手足厥冷或ハ小便清澄大便も至つてか
小通し又ハ泄瀉し遂に吐血て不止ハ虚陽乃浮
泛るなり血色鮮紅なりとも大切の證なり

療法 乾姜 薬店にあり 黒く炒末として童子小便に
調服す○又方肉桂 薬店にあり 一味末となし方寸匕
許を服す○又方人尿に生姜の絞り汁を入和匀し
て服す○又方獨参湯 方ハ上巻脱陽の條にあり ふく辰砂少 薬店 よあ至
末五六分越送下べし○又方人参黄芪 薬店

ずつ各一匁水に煎じ童子小便を加へて頻に服してよし

○又方手足厥逆強きは参附湯 二ノ八中風に出せり

又伏龍肝を前に末となし服する時點攪用

○最良

實熱吐血

吐血口渇て水を飲むことを好み或は咽痛躁煩大便鞕或は閉て通ぜず小便は色赤くして熱く或は頭痛する者は實熱吐血なとするなり

療法

黄連 薬店にあり 一匁水一杯を半分に煎服す

或ハ豉 納豆なり塩の入たるハ用へし 程二十粒許加入煎用又よし

○又方黄芩 薬店にあり 一匁剉水一杯を半分に煎じ服す

○又方鬱金 薬店にあり 末となし白湯にて六分許用ゆ

○又方山茶花 庭園にあるはそれなり 末となし白湯にて服す 一ぢやうまへ煎服又よし

○又方青黛 薬店にあり絵乃具に用ゆる一のいろう をと用ひてよし 二銭新汲水にて服す遍し

○又方黄丹 絵の具に用る品なり薬店にてたんといふ光明たん長吉たんとなふよし

一味新汲水にて一銭ほど服す○又方馬勃（後に図説あり）
末となし砂糖にて枇杷核大に丸し冷水にて化
て服す○又方黄栢子（倭名志このへい 薬店にあり）一両水に煎
し服す○又方大黄（薬店にあり）一匁末となし生地黄
の絞り汁一合許（大和銃前の邉にて多く作るゆへ汁を用ゆへし若生の根無処
にくハ薬店にて生乾地黄を求め一匁入べし）水ほど五夕許（若乾地黄用ハ水を合
五夕入べし）沸煮汁ほど服す○辣茄などの乾辛熱の
物ほど多く食ひ吐血するハ紅棗核ともふむし

燒に黒く焼き阿煎藥（葉店にあり 名さるぼう）和煅過し米飲にて服す

大怒吐血 人大に怒る事ありて後煩熱を發し吐血する者あり或ハ胸脇乃次痛満悶すなり

療法 南京瓷器を碎き末にし皂莢子仁（葉店にあり図説 中風に見ゆ）の煎湯にて二銭許を服す○又方青黛（説まへにあり）二匁新汲水に調服すべし○又方童子小便にて香附子（葉店にあり）の末を調て服す○又

方栢葉図後にあり薬店にあり末となし米飲にて服す

憂恚煩満胸中疼痛ある者に最よし

傷酒吐血 酒を常に好む人或ハ連日大飲をなし

或ハ甚酩酊して後大に吐血する者あり

療法 生葛根図説後にあり擣て汁を取頓に服す立に効

あり○又方天南星薬店にあり一両剉て豆の大さ

ごとくし爐灰汁に浸し洗焙て研末となし毎服

に一銭自然銅薬店にあり温酒にて磨り調て服す

○又方萊服自然汁に塩少許を入て服して尤よし
○又方赤小豆花せんじ服して最妙

中暑吐血 夏炎熱の節旅行なとして終に暑毒に中りて吐血する者あり其証氣怯體倦息微に或ハ熱し渇つよく煩悶て吐血するあり

療法 鍋底墨を研細にしく井華水にて服して連進二三度飲て良○又方生麥門冬圓説下にあり一両許搗て汁を取り蜜一合を入拌て二度に服すべし○

又方蘆荻（水邊に生るもの）外の皮を焼灰にし白くならざる様に焼く末にし蚌粉少許（蚌ハ田貝なり焼く粉とし図後に出す）を入れ研白麦門冬（薬店にもあり図説後にあり）煎湯にて一二分を服す○又方黄連香薷（二味共に薬店にあり）一匁宛水にて煎じ服す

凡何れの吐血にても暴に血を吐て湧が如くなる者或ハ一口二口よりして一二合漸に一升より数斗に至り氣血脱て危ことを頃刻にはかり此

際にありてハ何れも此湯にても下に載る所の通理乃方を試用ゆべし

通理方　急に人参一二匁細末となし飛羅麪一分温水或ハ井華水を病人の好処に随ひて和白く稀糊のごとくして徐々と服すべし或ハ人参二匁を濃煎じて用ゆ○又方何れの吐血にても乱髪よくよく油を洗去て焼灰し醋にて服すべし温水にてもよしとぞ○又方諸薬用ひて

効なきハ是病人吐出したる血の凝を何にても血の吐
多く吐きだらく
きれバ凝をのぞり火にて焙乾再炒黒し末となし
三分許を麦門冬の煎し汁にて服すべし○又
方烏賊骨図説金瘡に出を末となし飯乃取り湯にて
服すべし○又方茜草図説後に出るの根干たるもの
八末にして二匁ずつ服を生なるハ水煎服○又
方櫸漆をのミてよし百草霜ずつ櫸漆に攪用ゆ
亦よし○又方泊夫藍ありて薬店に一二分沸湯に擺

出し用最良◯又方白芨和名しらんと云乾たる末
もの菜店にあり
やくして二三分童子の小便にて用ゆ

馬勃

和名みゝだぶれ　又けむざし
又山ござま　又ゑでのござま
又けむりたけ

大さ鞠のごとくにして甚軽く
虚ろなるて綿よまぶた
たり 撲けバほこり出ツ
初生の時ハちろしぼり
内外ともに黄褐になる林
の中又ハ山の崖なと濕ある
所に生ズ古人苔の類とも
菌の類なりとも云り

側柏

和名このてがしハ

此樹ひの木に似て枝側生し人家園庭に多く栽るもあり去れども其枝根の本より四方に叢生して其木振ハ側に真乃側柏ハ一体の樹振偏側なり和に真の側栢稀なれバこれてのしらぬ以く代用ゆ功能ハ同じ

山漆（さんしち）

和名もさんしちと云

廣三七とハ別種なり

葉ハきざち
のこぎりのごとし

葉ハ艾のごとくして大よ
夏秋乃間花を開き其色黄なり茎ハ高サ二尺に及べり

今人家多く栽る所のものなり
花の状かく此ことし
吐血
十

葛花
俗名 くずの花
家園にあり山野にも多し其藤蔓延長きこと五六丈にして淡紫色糸り取牧く布襖となす者是なり葉ハ大豆又ハ楸の葉に似て青し背淡青

色あり初秋穂を
なして蒼累〻綴く粉紫色の
花を開く状豌豆花に似たり
又淡黄色のものあり紫花
薬に用也

秋の末莢を成し實
を結皁莢の如くして
其子緑にして扁あり
嚼バ腥氣あり其根外
紫にして内白長者八九
尺に至る冬月掘採て搗爛
葛粉を造者是なり

蚌
和名　からす貝　どぶ貝
處々溝渠水田池内に生ず大さ図のごとくなるより七八寸に至る色黒し海にハ絶てなし
真珠母又蚌と云此と同じからず

麥門冬

和名　まそうげひげ

此草大葉小葉の二種あり四時ともに枯ず林の下又ハ人家霤陰植置ものなり

五月花を開く色浅紫なり實ハ秋熟して色紫黒なり

根に玉有り是を用ゆ

茜草（せんさう）
和名 あかねづる
根の図ハ皆赤し

此草原野に生ず状図のごとく茎葉ともに糙澀七八月小白花を開根の色赤し其根を取て絳紙染るものなり

莖方にして苗延蔓となる

衂血はなぢなり

病狀 人卒に鼻孔中より血出て數升に至る者あり或ハ湧が如く出るあり或ハ點滴出るあり或ハ鮮血或ハ敗絮如くのこまりたるあり

療法 石榴花圖説後にありの瓣を鼻乃孔に塞べし

○又方蘿蔔の絞汁を鼻孔の中に滴入てよし

○又方藕を搗碎汁を絞り取く鼻孔中へ滴入べし

○又方墻頭苔蘚を採鼻孔中に塞て良

○又方車前草図説後にの葉を揉汁を絞り取り鼻孔の中へ滴入るゝ哉よし○又方燈心艸哉鼻孔乃中へ填塞てよし○又方蓮房図説後にありを火に焼末にして鼻孔乃中へ管にて吹込べし

○又方大蒜一枚細に研餅の如くなしめ銭の大さほどにして右の鼻より出るハ右の足心に貼左の鼻より出るハ左の足心に貼べし両乃鼻より出るハ両の足心に貼置し血止バ水にて

洗去べし○又方何にの紙にても火にやきて其
にほひを鼻へ入るやうにしてかぐよしむせ
てものまいればかぐべし○軽證は足のさきを
冷水にてひやすべし左の鼻より出るは左乃足
のさきを冷水につけ右より出るは右の足をひ
やし○又方百薬効なき者は病人の手の中指の
節の処を線を用て緊く括るべし若左の鼻孔より
血出るは右の手指を扎右の鼻孔より血出るは

左の手中指を扎若左右共に出るハ左右の手の中指を扎るべし

中指

此処を探べし

足心湧泉の穴へ詳に霍亂の條に記す 此所に貼べし

○又方茅花俗にほぐす此ほどを煎じて多く服（云圖説後にあり）てよし○又方山梔子（茶店にあり圖説後にあり）炒黒し末となし管めく鼻孔の中へ吹込亟外よりハ紙を

水に濡て鼻上に搭てよし ○又方鍋煤を水に調飲てよし ○又方鼻衄多く出て湧がごとくにして止ざる者ハ何にても大白紙一張或ハ二張いくへにも揃て十餘層となし厚くして井華水にて濕し其紙能く濕り透るを病人の髪除け頂心中に貼置其上より熨斗に火盛て当て熨當し熨斗なくんバ温石にて熨べし暫くして衄止なり ○又方山梔子一味せんじ服す ○又方荊

芥煎じ服すべし○又方代赭石薬店にあり末となし
少許を舌上に置べし○又方柿澀をかミてよし
○又方衂血過多出て昏迷氣つかれるハ生地
黄搗て汁を取連飲べし若汁を取て遅ハ其侭
喫ひ汁を呷且其滓を鼻内へ塡塞くべし若生地
黄無き所なくハ薬舗の生地黄を用べし薬舗にある生
地黄ハ干たる物なくなる乃地黄なきてハ○衂血多出て元氣脱
して危きハ前の吐血通理に服薬識用由意し

○衂血多く出止ざるハ項後髪際に灸する事三壮すべし又上星に灸する事七壮すべし　二穴下に圖あり

酒後衂血出て止ざるハ胡椒の末少許温酒に入攪服すべし此外前の傷酒吐血乃藥用べし

入浴衂血出る事あり辰砂茶店にありの末一二分白湯にて服すべし紫蘇子煎じ服も亦良

撲墮落馬後衂血出るハ瘀血上に衝上故なり明礬一塊其侭に病人に嚼て飲すべし

石榴

和名 じやくろ 訓

屢々庭園にあり木高大ならぬものなし又数種あり大抵地より叢生て小枝甚多し葉ハ楊に似て短く楊より薄して色も亦淡緑なり五月の頃より花を開く色赤し夏秋に至り不絶花あり秋實す結實綻て乍花開き

花實並て生じ実霜後経く折裂中に数子ありて味酸しもの世俗に入を用ゆ

花は千辨のもの有り又單辨のものあり

車前草

此草人家并ニ路邊ニ春初より生ず葉ハ匙のごとく三四寸より尺餘ニ至るものあり

莖數本出で図のごとくなる花を開き八九月實を結路邊ニ地ニ附て生ずるなり

實の図

花の図

和名　をばこ
又　をんばこ

山梔子
和名くちなし
山中に多し人家園庭にも亦多し樹大なるは高一丈許葉の状恒山に似て厚く両々相對す
四五月の頃枝頭に白き花を開き瓣厚し六出なり花衰へて黄色に變ず芬芳あり状図のごとし
秋に至て實熟す状図のごとし
黄丹色なり五六稜のあるものあり又七八稜なるものなり染家にて黄色を染るに是を用ゆ
實の状かくのごとし

白茅
和名ちがや
春芽を出す針のごとし
此をつばなといふ後に白き花を
生じ葉ハ薄に似て
小なり根花共に
薬に用也處々原
野に多し小兒
好で玩ぶもの是
なり
花をつばなと云
蓮房
はすのみがらなり
軸付より茎を去房ばかり
用也
衄血
十九

二
項後髮際穴
此穴ハ項の後髪れ生え際両筋の正中陥所よあり後の髪の際を定むる法ハ前巻中風百會の條よ出
上星
此穴ハ前髪際より上一寸よあり此寸ハ定る法并ニ前の髪際を定法皆中風百會れ穴の処よ委記せり
前髮際也
上星の穴是なり
項後髮際の穴是なり

齒衄舌衄

齒衄

齒縫齦との間より血出るなり

療法

付薬ハ蒲黄池沼に生ずる蒲の穂に有る黄色なる粉なり薬店にもあり図説後の金創乃條にあり炒焦末となし付べし○又方槐花図説下にあり薬店にもあり炒末にし付べし○又方香附子薬店にあり炒黒くし末にして揩べし○又方萊菔汁に塩を鹹きほど入て漱べし嚥てもよし○又方髪の毛を燒灰となし一銭許酢に調て服し且付てよし○又方

蟾酥薬店にありを少して紙撚の端に少許を傳く血出る処を見定按付べし立止

（蟾酥ハ咽に害らん）

凡人口より血出く吐血ハ齒衄か難ハ涼水に漱べし血須止ハ齒衄也止ざるハ吐血也

舌衄

舌より血出て縷のごとくなるなり

療法

大抵前に同じ○又巴豆薬店にありを研爛て紙に壓碾り油を取ｔ紙にて撚子を作り燈を付て吹滅其煙にて舌の上下を薫ぶ時ハ自

然と止なり

齒を抜て血出て不止

療法齒衂よ同じ

槐花

和名ゑまじゆ　今の俗ゑんじゆと云
大葉小葉の二種あり葉ハ皂乃葉のごとくに
して深緑色木ハ甚高く大なるものあり
夏淡黄色の花を開く花の
状紅豆よ似て細く簇
開くる圖のごとし此花
を取て用ゆべし

實の圖

木ハ器に作て用ひられし者是なり

花の圖

小便血

小便に血まじるなり

病状　小便忽に鮮血出る事あり

療法　螺靨草 図説下に出ス 汁を取少塩を加へ水にて飲下すべし ○又方益母草 図説ハ前巻疔毒にあり 搗て汁を取一合許を服すべし ○又方欝金末 薬店にあり 一匁葱白三茎水二杯を一杯半に煎じ用ゆべし ○又方車前草 図説前の血にあり 搗汁一合を服すべし ○又方琥珀 薬店にあり 末として燈心

の煎汁にして二匁を飲べし○又方髪灰 頭髪を焼て灰

とかしたるなり油氣無様洗べし二匁白湯に醋少許を入て送

下すべし○又方皮膠 茶店にあり赤く透る物を用べし撫手と云その

最も炙て水に煎じ服すべし

よし

螺厴草 又 和名 まめづる 又 まめこけ

處々陰の石上又ハ樹上に附く生ず

蔓草なり葉ハ貝の厴のごとく

大豆を二つに割たる大に似て

其色も青豆の色の如く

めして滑澤あり

諸失血眩暈

吐血下血鼻衄舌衄歯損血出て金創などにて血出ること過多なればバ皆眩暈して昏迷に至る事あり

療法　茅根前にある白茅の根なりを焼烟の中へ醋を灑て其臭を病人の鼻に嗅すべし且冷水を病人の面に噀て驚しむべし○又方辰砂乃末せ薬店にあり二三分白湯にて用ゆべし○又方石を焼き

赤くして酢を盆内に盛置其中へ右の石を入焠き其氣を嗅せてよし○又方好墨の濃く磨るを口に灌のませてよし○又方荊芥（薬店にあり）末となし白湯にて送下す○醒來後速に伏龍肝（竈の下の燒土なり）末となし湯に拌て飲むべし○當歸川芎二味各一匁（二品共に薬店にあり）水に煎じて飲むべし○出血殊に過多命危は急に人参一味濃煎じ用ゆべし或は人参一二匁細く

ぬる末となし飛羅麪一銭温水に和匀稀糊のごとくぬらし先徐に飲しむべし○泊夫藍薬店にあり一味煎じ服す急ぐときハ擺出し用てよし凡失血乃證通用て良此外前の吐血通理の條と参考べし

急喉痺　肺絶を附す

病状 暴に咽喉腫痛て閉塞水漿通らず言語ならず或ハ牙関緊急是なり早く理療せざれバ死

療法 徹しく咽喉腫痛事をおぼへバ急く釅醋をと口中に含く後通口嚥下すべし或ハ数含嗽すると肥ハ痰涎をと吐出て愈るなり酢なき肥節ハ冷水にて含嗽するもよし○又方園陸閑説後多少によらず判酢にて濃煎し

つめ置し喉の外へ塗傳べし○又方萊菔乃絞
汁を徐ゝと嚥下て良也○又方枯礬 薬店にあり を
末となし鷄子清に調匀喉中へ灌入て妙なり
○又方萆麻子 図説下にあり 乃殻を搥碎殻を去く
中の仁をとり紙に取研く末となし紙に捲て筒
のごとくし焼く烟を病人鼻孔より吸入さしむ
べし○又方巴豆 薬店にあり の油中のみをとりの附 壓碎バ油出ス
たる撚子紙に火を付吹滅て其烟にて病人ま

鼻に薫るを一時許にして口鼻より涎を流し牙關自ひらくべし○又方甘草を末一匁許管にて咽に吹入てよし○又方芒硝薬店にあり末少しつゝ吹入もよし○又方姫萬兩下に圖出説あり根を水に煎じ服すべし○又方喉俄に腫塞りて危殆に至ば巴豆一粒皮殻を碎去て針をもつて糸を右の巴豆につけ病人に呑せしむべし巴豆咽に入と覺ば急に糸を牽て出しぬべきなる時

小塞腫といへども咽通ずるよハ至らざるべし

○鍼藥共よ効なき時ハ乾漆を燒く烟を管にて鼻より吸入さしむべし乾漆なき時ハ何よても髹器物を燒べし

商陸

和名いをすき
俗よ山ごぼう

苗の高さ三四尺幹麁して線楞ありて微し

赤紫なり葉ハ青く
烟艸のごとくにして
小く
光澤あり花ハ黄
赤白の三種あり
花赤ハ根赤
花白ハ
根も白し赤ハ毒
あり食ふべからず
喉痺の藥に外に塗
には赤黄共に用べし

食料にハ花白を
用ゆ花謝て實を結ぶ
莖葉状ともに圖のごとし

蓖麻子

和名　とうごま

此邦此仁を搾て印肉の油ともする物なり　人家多く栽置所乃ものなり

此草春の末苗を生じ茎赤葉ハ麻のごとくにして大し茎より枝を生じ黄色の花を開き實ハ圓のごとく刺あり此實を劈開けバいくつも大豆ほどの子あり子ハ斑にして牛蜱に似たり

實の状かくのごとし

葉の状如此

高さ五六尺ニ至る実土用中ニ取べし若土用過ハ殻の中空ニして物なし

姫萬両
夏枝の頭に小白花を開き實を結ぶ平地木の實のごとく色赤し四時落ることなし実を結べば其枝の葉皆落く實のみ残る此根を取用ゆへし
百両金の一種倭小なるものなり故に藝家ひめ万両と呼て盆玩とし木の状全く万両に異なくして高さ僅に尺にみたれ

肺絶 急に咽喉腫塞痰喉に在て響き聲鼾乃ごとく面色青惨たるハ肺絶なり至て危篤なり

療法 急に獨参湯を濃煎じ生姜の絞汁と竹瀝少しく加へ頻に服さしむべし若遅きときハ十人に一人も活きべからず 竹瀝を取る法上巻中風に出ス

搶食風

病状 人飲食するとき忽然口中に大拇頭或ハ小指の大或ハ大豆小豆の大さに腫起り其色黒くして物を呑ことならざれバ搶食風と云

療法 急に指の頭にて黒色に腫起たる所を抓破りて血を出すべし黒血出バ生地黄 薬店にあり 一味多少に拘ず濃煎じて服すべし何にても鳥の羽の翮の端を削りて尖なる処にて刺破

る最よし㊀又方紫蘇葉生にても干たるにてもにても細に嚼て白湯にて嚥こむこと数度すべし

真頭痛

病状　頭痛甚く脳盡く沈痛或ハ連歯痛つよく手足厥冷爪甲の色青く若其冷手ハ肘より上までのぼり足ハ膝の上まで冷のぼる者ハ理しがたし然ども理法あり可施

理法　速よ百會（図説中風の條よあり）の穴よ灸すること数十壮且大剤の参附湯（人参附子等分なり）濃煎じ猛服して死ちを免る者あり

[illegible]

十壮 具太衝の穴附陽及人参附子の類 章門 臨泣

理 速ニ合谷 曲池 中風の穴を灸すること数

理 ○もし 然れども理法あり

手足のはし冷ゆる 六脉の上まで冷れば治し難き者

手足厥冷爪甲も青く其冷手は肘まで

病状 頭痛甚しく脳尽く痛み或は連歯痛して

真頭痛

心腹卒痛むねはらにはかにいたむなり○心腹の痛一様ならず其大抵を左に記して各〻これ説をしるしむ寒熱蟲癥痰食六ッに分載たり

蟲痛 心腹痛時作り時止痛止ざるときハ飢ゑを能食し痛発たるときハ口中に冷唾たまるなり或ハ清水を吐き或ハ涎沫を吐て面青黄或ハ白して口唇紅ハ蟲痛なり

療法 烏梅（薬店にあり）多少に拘ず煎汁を服すべし○又方蜀椒（朝倉山椒を用ゆべし）能炒て酒に浸し其

酒を飲てよし○又方艾葉生なる者を擣く
汁を服すべし生なくバ乾たる物水に煎じ服
すべし○又方使君子 薬店にあり 皮を去り肉の仁
ばかり四つ五ッ食てよし又榧子を食もよし
○又方五靈脂と檳榔子二味共に薬店にあり 等分に末とせ
なし白湯にて送下○又方熊膽小豆大許温
水に解服す

寒痛 綿々といつまでも斷間なく痛て胸す

きて飢ごとく按て快く大便泄瀉或ハ下
重になるハ寒痛なり俗に冷蟲と云
療法 木香（薬店にあり）末となし温水に送り下すべ
し○又方艾葉生なるものハ搗く汁を絞服
乾たるものハ煎じ服す○又方焼酒に塩少許を
入服す○又方温酒に生姜の絞汁を入れ服す
飲し○又方干姜末となし白湯にて服すべ
べし○又方胡椒十四五粒酒にて呑ますべし

○又方呉茱萸薬店にあり一味煎じ服すべし○又方
葱白を濃煎じ服すべし○又方肉桂薬店にありを一味
煎じ服すべし或ハ末にして白湯にて服べし此證最
灸して良中脘天樞氣海三穴圖説見計ひ灸すべし脘陽に出

熱痛

暴に痛暴に止く復作り痛む所へ手を近づく
ことを嫌或ハ面赤掌中熱く或ハ身に熱あり
或ハ大便鞕く或ハ不通或ハ瀉者あり瀉様ハ
先痛一陣ありて瀉ことを又一陣大便臭きハ是

熱の痛ある

療法 黄連 薬店にあり 一味剉て水に煎じ服す○

又方苦参 薬店にあり 剉煎じ酢を加へて服す○

又方黄芩厚朴 二味共に薬店にあり と同く煎じ用べし

○又方山梔子炒焦して煎じ服す○又方蜂

蜜を多少に拘ず喫てよし○又方芒消黄

連二味煎服す

瘀血痛 心痛湯水を飲て嚥下バ必吃逆をなす

八瘀血とハ腹痛一処にて他所へいつまでも
移ず動かざるハ瘀血なり

療法 芍薬甘草 二味共ニ薬店にあり 此等分にして煎服
させ○又方紅花 薬店にあり 画にも花なりを 研く温酒にて服させ
○又方五霊脂 薬店にあり 此酒或ハ酢にて服させ○又方
桃仁 薬店にあり 二匁許煎じ服させ○又方桃花 干たるもの の葉
店にあり此を煎じ服させ次の痰痛用るもよし を用ゆべし

痰痛 心腹痛て腹の中漉々といへる聲ひゞく

手脚寒く痛或ハ腰膝背脇抽掣て痛をなす
ハ痰飲にて痛なり

療法 礬石を酢にて煎じ服す○又方五倍子
おはぐろぶしなり炒焦して温酒にて服す○
図説中毒にあり
又方蛤殻図説下にありを煆て研末となし香附子丸
末を入同く和白湯にて服す○又方白螺殻図説下に
ありを焼研末となし温酒にて服す

食痛 飽食せし其当日或ハ翌日又二三日以後に

に腹痛して其證乾霍亂と同きハ食痛と知るべし療法大抵乾霍亂に同じけれバ此に略す

蒸法 以上五條の心腹疼痛何も蒸藥殊によし然ど但し熱痛にハ忌むなり其法塩を炒熱して紙又ハ綿に裹て腹と臍下とを熨すべし○又方葱白を剉く炒熱し紙或ハ綿に裹みて熨すべし

真心痛 手足冷あがりて青くなり心中痛強く

背へ徹り堪難ありて死ぬることあり然ども理法あり

療法 芭蕉 人家庭園に栽るものなり 葉を搗て汁を取く

生酒に調和せて服すべし

蛤 和名はまぐり

江海處々にあり大なるあり小なるあり状圓にして殼に紫赤の花斑雑色種々の紋あり其肉を煮て食し或ハ炙食又海濱沙上にある貝の雨露に晒され波濤にうちくだかれて碎たる者を拾あつめ焼用也又これを海蛤と云

白螺

田螺の殼の久しく雨露に曝されて白くなりたるを用也田螺ハ和名たにし又田ぬし水田小川池瀆の中に生ず大さ大抵圓にして其殼の状圓のごとし色蒼黒にして三四月の頃腹内に子を抱く一に三五子あり細小なり

海邊にて八希螺長螺用ゆ次に圖ス

赤螺和名あかにし状拳螺に似て尖角なし紫黒なり口圓にして一方の端尖内の色赤し磨れば色黒して薄し肉乃頭外黒く中白し尾も拳螺に似て蒼黒腸の味辛し四國西國邊に産する物は尖り角あり功用は同し

長螺和名ながにし赤螺に似て長く小なり口赤からず状圖なれども肉の味赤螺に優る

赤螺

長螺

急黄

病状 人卒然に渾身黄色になり心腹満悶て気急喘息する者は命頃刻の間に在り危殆病なり

療法 瓜蒂 薬店にあり真桑瓜の蒂なり末となし 越前より出る味苦きもよし 鼻中へ搐入て黄水出るがよし或ハ丁子 薬店にあり 少許を加○又方煖醋にて瓜蒂末四五分を服すべし即吐却すべし吐するがよし

もよほし吐ざるハ沙糖一塊を含噉べし若又吐て止まざるハ麝香を湯にて少〻飲むべし此方を用て吐やまざるハ後の中毒乃除るへきなり○又方蔓菁子野菜の品を擣て汁を取り水に和て啜べしなり○又方苦瓠状夕顔のごとく長くして本細く末大味苦きものなり一枚孔を開水にて煮て汁を鼻孔中へ滴入れ鼻より黄水出てよし○又方雄雀屎糞の頭尖るハ雄雀乃屎なり湯に化多く飲べし

卒瘂

病状　人俄に言語なくして聲いでざるなり

療法　萊菔の絞汁に生姜の絞汁を和徐々と服すべし〇又方橘皮半夏 二味薬店にあり 水煎し服〇又方杏仁三分皮を去熬桂枝一分 二味薬店にあり 末にし和泥のごとくし無患子程を綿に裹み口中に含み徐々嚥下べし〇又方生姜汁をのむべし又嚼食もよし

懸壅垂長のんどのひこさがるなり

病状 凡人喉咽の前上腭より垂る肉あり俗にひこと云此ひこ暴に腫垂長なりて咽喉に妨悶をなすあり是懸壅垂長と云なり懸壅とハひこの事なり

療法 鍼にて破るべからず大に害あり枯礬に塩少し許を入て碾て末となし筋頭に紙を捲き蘸て腫処に塗べし○又方芒消

茶店にあり濃くせんじぬるよし○又方乾姜半夏茶店にあり二味末となし舌に着て嚥くよし

指頭卒痛

此證軽と重きとの二ツあり大抵肉に蘊毒ありて痛外に發するなれバ速に理をもてきに到らバ惟一時の痛を凌て害なく急卒此苦を緩むる藥一二を載るなり

【病状】卒に指痛忍べからざれば丈夫といへども叫喚するに至るべし

【療法】木粘鳥を捕に用る粘なりを痛所へ貼てよし○又方活鯽魚を搗爛て泥のごとくして痛処に貼てよし○又方芒硝藥店にあり五六分白梅肉にまぜ

痛所へ塗べし○又方上々のひき茶をめし糊よくまぜてぬりてよし○右の方にて痛ミはちらずまらざるハ活雀を捕て腿の付際より小刀を以て断ち切口より痛処の指を腸の中へ挿入てよし雀死して冷バ換て痛定を待く停べし鴿を用もよし

無名腫毒

何とも心得がたく名も知ざる腫物を生ずるこそあり早く傳薬等せざればおそらくハ害ある事甚しかるべからん

療法 紫葛 後に図あり 根皮を擣く酢に和て封べし或ハ根を搗糯米の粉と等分にし温湯にて調和患處に貼べし其腫に熱気あらバ用べからず○又方三七 前の吐血の條に図説あり 磨醋

に調塗べし○又方商陸やまごぼうなり前の急喉痺に図あり
鹽少許入て搗和て傅べし○又方蔓菁根かぶら菜なり
の根を搗て塩少許を入和て封べし○又方金銀
花忍冬の花なり前巻脚氣の條に図あり茎葉ともに擣て汁を絞
取て温服すべし其滓を患處に傅べし

紫葛 和名このねぶ
蔓草なり山野にあり春生し夏花をひらき秋子を結び冬枯る茎紫色を帯て堅葡萄に似たり

○孫ぶハ葉背紫色にて毛なし
ゑびかづらハ葉背白くして毛あり

葉の形くれなし
又葉缺浅きもあり

又一種此草に似て
ゑびかづらと云草
ありよく葡萄に似て
子色黒く大豆ほど大きさの
ごとし児好く食ふ孫ぶ
子ハ豌豆のごとく俗に馬の目
玉と呼食ふべきものにあらず

且つ孫ぶハ根に粉ありゑびかづらハ根に粉なし

卒聾

病状 人平居無事にして卒然と耳きこえざるなり

療法 香附子 薬店にあり 尾にて炒研て末となし萊服子の煎湯にて服すべし ○又方蚯蚓塩を入擣たる葱の内に置バ化て水となる取て耳の中に滴入べし ○又方全蝎 薬店にあり臨づけなり塩を出し用ゆ 末となし酒に調て耳の内へ滴入べし耳の内きいて鳴て愈るなり

耳中卒痛

病状 膿汁ハ不出耳中俄ニ惟痛はげしき證あり

療法 椀架下汚水を一滴計耳中に灌入てよし

○又方椎茸 なり 食料の物を湯にひたしよくしたし出し其汁を少〻耳のうちへ入まてよし

○又方唐大黄辰砂 店にあり 二味共に等二味等分末して湯にとくうすくときて少〻耳の内へ入まてよし

○又方熊膽 上巻積氣暈倒の條に説あり 一分許龍

脳薬店にあり少許涼水にてよく化し其水を耳孔内へ滴入ること二三度までべし痛止て後頭を傾て出すべし〇又方萊菔の葉を搗て汁を取り耳中へ入べし

舌卒腫大

病状 人舌卒に腫大になりて口中に満者あり

療法 雄鶏の冠を刺く血を取撚紙に浸再草麻子薬店にあり図説の油に蘸し燃し薫べし○又方生蒲黄薬店にもあり図説金創の條下にありを塗べし少許乾姜の末を加へ最よし○又方硼砂薬店にあり細末にして切る生薑につけ舌を徐と揩べし○又方釜底煤なべ墨に塩少許まぜ舌に傳べし

脱去ときハ又傳べし○又方龍脳あり薬店に末にして傳く妙なり

小便急閉

【病状】小便俄に閉て通ぜず小腹堅満悶乱者あり

【療法】白菊根搗汁を生酒に沖く和温服す ○又方 急に諸魚の頭に在る石を取り末となし一二分白湯にて送下すべし 諸魚の中いしもちきれ最もよし ○又方 蝸牛 図説疔の條下に詳なり を搗爛紙にのせ臍下に貼り手にて其上を徐々摩すべし 田螺をも用ゆもよし ○又方象牙煎用ゆ ㊂ 小腹脹急堪

のどきハ蓖麻子図説急喉痺の條にあり三粒殻を去研細し紙撚に右の末を塗て欬々を陰茎の孔の内へ入べし三四寸程も入く又そろ〳〵と出すべし琥珀油阿蘭陀渡りの物なり薬店にあり或紙撚に付入る最よし○又方皂莢図説中風にありの末鼻に入嚏を出して良○又方小便不通死せんとするハ蚯蚓或よく研冷水中に入滓を濾去て其水或半碗飲べし立ところに通○又方髪灰頭の毛乃黒焼也冷水にて飲べし

石首魚
和名石持又ぐちと呼西國にてハもくちといふ海魚之小なるハ
五六寸大なるハ四五尺許ある者なり頭中に石二ッあり
此石を用べし魚の形圖のごとし
色ハ淡黄白きなり鮮しきハ青く光るなり
少し微紅なる所あり
此魚に似る一種鮸と呼者あり
頭中に石なし
幾すゞい
又きすと云海ぎす河ぎす此二品なり状大抵同じ
いづれも首に石あり取用ゆべし
此外棘鬣杏魚皆頭中に石あり代用ゆべし
小便急閉
四十七

脱頷(だつがん)　あごはづれあり

病状(びやうでう)　人口(くち)を大(おほき)に開(ひら)て笑(わらふ)或(あるひ)ハ欠(あくび)をしそこなひく頷(あご)はづれかけが袮をつまく口(くち)は合(がつ)はせこなふをならざるもあり

療法(れうほう)　其人(そのひと)に酒(さけ)を酔(よ)ほどに飲(のませ)睡(ねむり)る中(うち)に皂莢(さうけふ)（圖説中風にあり）の末(こ)を鼻孔(はなのあな)の中(うち)へ吹入(ふきいれ)嚏(くさめ)をさせて自然(しぜん)に復(かへる)○患人(びやうにん)の体(たい)を柱(はしら)に倚(より)かゝらせ頭(かしら)をおしつけて動(うご)かぬ様(やう)にし身(み)を

平ゐして安坐せし者外の人正面に向ひ両
の手乃大指を口の内へ入れ槽牙の上端を捺
下頦を托住て一先手前の方へ引下却て息ふ
持擧向の方へ一拍子に送上くれし迎え關竅
乃處へ拔べし扨夫より以後に絹木綿の類ゐて
頦と顛とへ兜置こゐて半時許ゐしてよし一指
子にかきつゐとへて其を把口の内へ入れ
まる大指をそろそろやく引出ゑべし其引やう

乃拍子少しもちがひなくかきがし◎このつるよ記
よ指をそひ切る程のことゝあるなり工者ハ
らぐハあしゞさし凡脱領肩骨脱骭の類速
よ療理せざれバ復しぬる者なりはやく瘍醫
を迎べし　右の法古人傳る所みして最良方也
然ども是ハ術なれバ手よ覺ずして醫
漫よ施し却てちりりのこんをそこのうかさし
者を迎て理せしむるよ如ハなかるべし
◯一度脱領をあれバ其後大よ笑又ハ欠まると記
幾度も脱るゝのり面を側方へ向くゝろひ或ハ欠も
進バ脱るゝなし心會れ
茲えり記す

卒然牙關緊急

病状 人外ハ無病にして惟卒に口をひらく事ならざるあり

療法 鹽梅一二箇核を取去肉を取り牙齒に擦塗く口開べし若開て閉ざるハ再塩梅を牙に擦く口の開合の様子を候く塗るをば停むべし

脱疘不收

だつこう出て入さるなり

療法

脱疘おハさまつゞるハ生なる柿の葉又ハ青木（青木ハ擦傷の所よ図を出せり）乃葉をとり火ふあふし炙あてあつくして脱肛へおしあてゝ徐ゝと按入べし

○又方 蛤（心腹痛乃條よ図説あり）一二升水をいれずよむして売ものなり蛤の肉じうを絹きれぬつゝみしあつきほどなるをおしあてゝそろ〳〵とおし入べし包ミたるきれより汁はち多く出る

やうにすべし○又方青海苔（色青く細き海苔也伊勢のりといふもの）是れをあつきほどの湯に入れやき塩を一撮ほど加入ればいよ〳〵よし○又方阿煎藥（薬店にあり唐を用ゆべし和名さるばうといふもの是なり）蠟に和く塗べし○又方五倍子（薬店にあり洗中毒にあり）閣明礬等分湯にて煎じ洗絹切又ハ芭蕉の葉又ハ荷乃葉にてそろ〳〵托入べし

長蟲下出

病状 人偶肛門より長き虫出る事あり其長七八尺より丈餘に及び半日一日みしも尽終にあり強く牽出せバ断て出ぬ全く出る故に

しとれ 虫の形匾して節あり真田紐乃ごとくなり色白し

療法 出る所乃虫の端を筋様の物に尽纏て熱き湯を器物に盛をき其中へ浸せバ虫乍に出尽るなり

外傷之類 怪我幷ニ蟲獸ニ咬るゝ等外より傷るゝものをこゝに載

金瘡 刀脇差等の類惣て刄物にて怪我せしをいふ

凡刀傷ニハ水を與へ飲しむ事なかれ且風に吹るゝ事を忌若此禁を犯せバ大害にいたる

凡金創血多く出るを忌速に燈心草に毎夜燈火に用ゆる所のとうしみを其瘡口の大小程にりと丸くしめて押付其うへを木綿にても絹布にてを抹く置べし血自止如此して醫の來るを待べし

○又前方にて血止まざるハ葱の白根并葉共
に搗爛て紙に包熱灰の中へ埋置熱りたる
を取出し傷処へ敷べし若冷バ幾度も換敷
置し○又方熱小便にて刀口を洗べし洗に
ハ燈心草并瓣の大小に従て或ハ一握或ハ二握
許を線にて紮端をそろへ断小便を浸て
洗くよし血自止○右の方にても止ざるハ先
何にても銅鐵物を焼て刀口の血の出る処を

ちよつと當て急に去べし血自止凡刀口處の肉中に血の出る口あり其沸出る口を能看定て當ざれバ血止ず銅鐵物火中に内赤くなるほど焼て直に用ゆべし○右の諸物無ときハ人の糞を傷處に封てよし血自止○手足の内みなく搶きづにても斫疵にても一處血走絲の細に出て何如樣にしても止ず遂に死に至るあり是を止むるにハ凡人の股乃付根陰毛の際

と腋の下に真中ニ動脈あり自試て知るべし
手に疵ある時ハ何處ニても腋乃下の動脈を
上へ掛物の軸様ニ木を削りて右に木を押當
強く捩付て上より木綿切ぬくも絹布切にて
と緊く肩へ掛幾重も纏付く脈乃通の留る程
強く結べし暫くして血自止なり又脚ハ腿乃
付根の動脈に上ミ右の通りにすべし是にて血
に止ざるハなし

血止たる後　生の鶏卵を破く清黄ともに和匀あハせ布を漬く其布を傷處に當置其上を木綿にてく志めて抹て瘍醫の來を待べし或ハ鶏卵の清を疵口へぬるもよし血止りたる後醫來るを遅又ハ疵口至て大なるハ活鶏を剖く熱き皮肉を取急に刀口に拄下置べし冷バ幾度も換て冷ざる様にすべし凡金瘡刀口大に開るハ皆此法を用く醫の來を

待べし

腹を斫て腸出たるハ急に新汲水を口に含て其人の面に噴て其身を噤慄せしむべし腸自入る若一両度噴て収らざるハ幾度も噴但し腸収を見て止べし

金瘡身戦暈絶人事を知ざるハ熱き小便を灌のませてよし童子の小便最よし○又方馬糞の汁を絞り熱湯に和し用ゆべし獨参湯に

和し用ゆ最よし

喉を刎る人ハ先其人を仰臥しそ枕を高し頭面まへうぶりにしそ刀口開かざる様よろべし扱風を避衣被を蓋く煖かろべし若呼吸よ別条なきハ白米一合人参一錢生姜三片入く粥を焚て粥の清を啜く元氣を接補て醫ハ來を竢べし

刀割斧斫夾剪鎗箭一切諸傷瘢小なるハ生半

夏（薬店にあり）を研末となし帯血傷処に敷てよし

血自止○蘿摩實内綿（後に図あり）採て貼べし血減

止るなり○又方烏賊魚骨（図説後にあり）研末となし傷

處に摻てよし○又方龍骨（薬店にあり唇に付て吸付ものを用ゆ）

べし末となし傳べし○又方石灰ねた末傳て

よし○又方唐大黄（薬店にあり）炒黒し細末となし

傷處に摻てよし○又方雲母引たる扇子（萬歳扇と

江戸人云ものよし）焼灰になして傳べし○又方麒麟血（薬肆

よあり細末となし摻てよし○又方蒲黄薬肆にあり図説後に出す傳てよし○又方青蒿図説後の咬にあり蟲生にて揉傳てよし血を止○紫蘇の葉生にて揉傳くよし

鳥銃子人の肉の中へ打込たるハ

滚酒の中へ蜂蜜を冲て多飲べし○又方天南星薬店にあり末となし甘草煎汁に和傳べし○又方食蓼穂研末にして苦参黄栢二味薬店にありの末を和額貼てよし

蒲黄

和名 がま みずば

蒲ハ水澤の中に生して葉ハ莞に似て扁し背面ありて柔かなり状図のごとし夏茎を生じ穂をなす茶褐色にて状蠟燭のごとし此に付る黄色なる粉あり即此草の花なり是採用ゆ是蒲黄なり

茎葉共に三四尺に至る實の長さ五六寸なり

烏賊魚　和名いか

此物大抵五種あり
すみいか　もりいか
あをりいか　水いか
するめいか
右の内するめいかハ
五島いかと云皆乾
て鯗と成る此に
用ゆる所ハ骨なり
骨ハすみいか江戸にて甲いかと
云針いかハ頭上に鍼あり故名づく
此二品共に骨あり用べし其餘の
三種骨甚薄柔軟にして薬に入れず

金瘡

蘿摩

和名　がゞいも　ちんぼのち　香とう艸

蔓草なり葉圖のごとし大なるハ柳の葉ほどなるもあり相對して生ず勦バ白乳出す六七月葉の間に小花を開く淡紫色なり十餘花づゝ攅てちいさき穂をなして別に莖を出す實を結長サ三四寸なり其殼青紫色にして鬆軟なりて疵瘢なり

實の狀かくのごとし

殼の中に白き絨あり長サ一寸許色至て白し

舌斷

大人小兒偶小刀を含誤て舌頭を割斷己垂落たりともいまだ斷さらざるハ急よ雞子れ白皮を取舌頭を裹て亂髪を燈火のうへにて燒灰となし細研て末となし蜂蜜（薬店よあり）和て舌根よ塗べし如斯して大抵三日許にして斷口接もの也

跌仆まて舌を穿斷て血出ぐ或ハ不覺自咬

傷て血不止ハ倶に鵝翎を米醋に醮し頻に傷處を刷べし血自止仍蒲黄前に見えを蜜に和て噏化てよし

擦壊

跌傷或ハ手足或ハ面の皮肉を擦壊るハ青木後よ図あり の葉を醋ゐて煮數沸し麻油少許を滴入く其葉を取出し傷處よ貼くべし○又方皮膠 薬店よ有り を水よ煮て熔化し傷處よ塗る最妙なり婦人嫁痛よ最よし

女子誤く陰門を擦く痛バ急よ烏賊骨 図說前よあり を研細ゐして鷄子黄ゐてとぢ塗てよし

青木

人家園庭に多植其葉大なり樹色青高四五尺一丈に満ず枝多く生じ實の大さ棗のごとく冬熟して紅なりひよ鳥好で食

攧撲墮落壓倒閃挫落馬

凡壓打く氣絶したるハ其人をして僧の坐禪をるが如くに坐らしめ一人ハ其頭髪を將て控張て半夏（薬店にあり）の末を鼻孔の中に吹入る宜し猪牙皂莢（薬店にあり）圖説中風の末或ハ胡椒の末を吹入るも亦よし嚏をして活却らバ生姜の絞汁に香油を拌匀て灌べし○又方墮壓して氣絶せバ其人を仰臥せ置此方の両乃手掌を以て患人乃

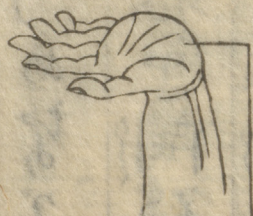
兩の耳の孔をちからを極く同時にちやうと打
其手を直に腕と押付て放たれ置ながら徐と
手を動かし其人眼を開を待て手を放すべし
し其後湯藥を與へ飲ましむべし左に圖す

救打撲而昏冒人圖

如此に病人の両の耳を両
の手にてしかとおさへ其
手をすこしおしつけ
置ながら向の方と手前の方へ其手を
そろくとうごかすべし病人正氣
になるをみて手をはなすべし

○又法死人を仰ニ卧しめ救人其上ニ跨立て
左右の手にて腹を上より下の方へ志きりと數遍
摩其上ニて左右の掌を死人の臍の下ニ當嗢
と息をつめながら一息ニ上の方へ強く推上ぐべ
し必眼を開なり其時引起項後を強く捺て
後脊骨の左右を強く下の方へ按摩すること數遍
みして聲を揚て呼ながら掌にて二川程脊
の七八椎の邉を強打べし必蘇なり左ニ圖せり

又救打撲昏冒圖

臍の下ハ氣海の邊なり氣海の穴ハ前の陽脱の係に圖說あり

左右の手共に此所にちからを入て按あぐべし

腰をかゞむるにあらず立ながら腰をかゞめて摩按すべし

此左右の手にて胸の方へ推上べし

服藥

墮撲て乍氣絶せるハ右の法を施し活却しを後熱小便を多く飲べし瘀血小便より下るなり或ハ飴糖を熱て溫酒に和のませてよし

又よく瘀血を小便より下すなり

諸閃肭閃腰打傷并手足損傷　血出ずして痛惟

其處の色或ハ青或ハ紫なるハ先葱の白根を剉
細にして炒熱くし其痛處を擦熨あたゝめて
急に大黄の末を生姜の絞汁に調へて敷て其人
の酒量に随酔ほど好酒を飲しむべし○又方
朔藋又ハ接骨木二品ともに後に図あり何れにても水に煎
じ二三椀をのミ且痛処を薫洗てよし○又方

驄馬の糞（驄馬ハ地皮黒くして毛白し月毛とまじりたるものなり）を温湯に和て痛所を浸し洗温し○又方蘩縷（図説下にあり）茎葉ともに搗く染家糊に和て痛所にぬるべし○又方楊梅皮（薬店にあり図説末に出し中毒にあり）紺屋糊にまぜ痛処に塗くよし○又方水仙の根（人家に栽又ハ生花にする冬花開く草なり）擂て痛所に塗べし又せんじ服するもよし○又方老茄子の黄色に大なるをとりて薄く切尾盆にて焙細末

みして二匁許づゝ酒にて服す ⊕ 又方大豆を
末にして酒によく嚼て貼てよし

血出び傷所紫色 なるは瘀血心を衝き煩悶む
ことあり先童子小便を灌與へ飲しめ豆腐を
煮熱のうし先き處を熨て冷ば換べし紫色
漸にきめて淡紅に變を好とす

筋骨折傷痛甚 は急に雄鶏一隻を捕刀をもて刺
て血を取酒に和く飲痛立ずに止

蘩蔞

和名 はこべ　あさしらけ　びんづる　ひづる
まんづり　ひづり　へんげる

此草所々湿地に多し正月苗を生じ地に布て蘩衍とはびこるなり此草に仙人さるものあり此草は茎葉ともに青く茎を断ば空にして中に小縷あり

三月以後白花を開形図のごとし実を結ぶ

又此草に似て微く赤色を帯て茎を断バ縷なく味苦きものハ唐にて鶏腸といふ別物なり此二種ともに和名はこべといふ名に依て誤る所なり

接骨木

和名　木たづ　[illegible]くおも　こもうりぎ　にはとこ

此木田野人家庭園に生ず高サ五六尺より一丈許りに至る春葉を生じ花を開く色黒紫にして至て細かり又白き花のこれあり花落よ去てながく實を結ぶ

蒴藋

春れ間ハ葉の裏少し紫色を帯枝の節きハ紫の斑あり

和名 よいぞめ
そくづ さいた
はちひとくさ

此草田野園庭に生ず接骨木ニ似て草なり花葉の形状同じけれバ別に圖せず

眼為物傷（めよりやぶるほ）つれ目うち目なり

軽きときハ人乳を多く滴入べし沙糖水もよし

○又方水仙の根人家園庭（かいせんてい）に栽又ハ生花に用ゆ とき根なり

研て沙糖にまぜ合せ點（さす）べし

○睛（ひとみ）を傷たるときハ蠅（てい）の頭 夏月人の家に飛集る虫なり

を取まく研爛（すりつぶし）沙糖又ハ人の乳に調（まぜ）て

數度（ふびく）目に點（さす）べし ○又方鹿茸（ろくおう） 鹿の袋角なり

薬店にあり新しきを用ゆべし 至極細末にし人の乳に調（まぜ）せ

度々目の内に滴き入べし重き傷にと

いへども愈得あり

目睛突出　目の玉とびいづるなり

人極て重き物を無理に力いたして提挙又ハ他奈
ふらく殴て一眼或ハ雙眼ともに突出る事

有急ニ手巾様の物を水又ハ湯にひたして湿
若ニう腐をきざじれバ目睛粘り着て其眼睛を盛旋
まかれぬとあやれバなり

轉目系れ乱ぬ様ニして眼睛ニ附て糸節あり
おじうねりうふくく目系とふ此系れ入乱ぬ
為て入給へを蒸し納入る事し扱摘又湿巾にて

其上を裹み住て三日れ間開く事うして著し

早く裏衣巾にて解ば眼は旧の如く成ても風
寒に遇ば常に痛を發すことある者なり
○又方急に手掌に唾にて多く吐込其手にて眼
睛どうけを擦くとおし込手拭様の物にて包て
置事三日にして解べし強く鼻を擤目睛飛
出る事を恐り心得有べし是を知り
○又方生の地黄を搗て綿に裹み目睛の上につけ
萬能膏を紙にのべ其上に張付置べし

湯盪火焼　湯火にて焼と云事あり

湯火の傷生の胡麻を杵細にして厚く封て吉○又方稲稿を焼灰となし湯の中に入て其湯冷て待て急に痛処を漬べし疼痛頓て止なり或ハ冷灰を水に調塗てよし○又方蜂蜜を傷所に塗てよし○又方冷飯を其侭封てよし○又方淳酒の内へ傷を浸べし傷處大なるハ布綿衣物杯類を酒の中にひたし傷處に當其衣物

あたゝかなる湯時ハ幾度も浸しなどして當べし
酒ハ三年以上の濃を用て吉
○又軽きものハ水に蜜を入和服してよし
○又方少しの湯火傷ハ炭火の上へかざして痛を忍
ぶるゝ暫時をへし早く愈るなり○又方蛇苺草
図説下にあり搗爛て塗てよし○又方蜜柑の汁を
絞塗て吉○又方側柏葉図説吐血小有搗爛し
傳て吉○又方鶏卵の白ミを塗て吉

○又方伏龍肝（き焼土なり）竈の下の古土を水に和て傅べし
○又方石決明（鮑の字を用る物なり）へ水を入て小刀にて數遍かきまはして其水を痛所へぬりはけ候石決明は新しきはよし古年を經たるは悪し鮑の肉は不用其貝がらへ水を入る也此方甚だ効し
○遍身燒灼したるは急に萊菔の絞汁或は童子の小便を服しめて後好酒を甕にても桶にても多く入置其中へ病人を裸體にして

浸入てはしよ重言とも死に至べし

○凡湯火傷童便を飲べし火毒内攻せざれし

大人の小便も童便なき時は用てよし

○失火にて圊焼たるに、やけれ糞缸へ人誤り踏

込足けどせし、生茄子を擂多くけを取傷所に塗て

よし○又方山薬を擦塗て吉

○凡湯火傷冷水を漱べからず一旦は痛治

似たれども火毒内攻して大に害有

蛇苺　和名へびいちご

ケ川むいちご
かよにのやまもし

此草地に付て細き蔓を引節の下に根を生じ葉三づゝ出るもあり又五ツ七ツ出るもあり四五月の比黄花をひらく形圓のごとく五瓣あり實の形圓のごとくにして紅し茎葉ともに用ゆべし

實の形いちごのごとく至て細し

凍指欲墮

人霜雪を侵し手足の指凍痛ミ或ハ不仁痛痒を不知已て墮と欲るあり

療法 馬糞を煮し其汁の中へ指を漬ること半日許りにして愈

人咬傷

人の爲ニ咬れて疼痛をなさハ龜の甲を焼て灰となし香油に白て付べし龜の代ニ鼈の甲もよし○又方鷄の溏屎にて咬たる処へ塗べし
○又方熱き人屎にてよく傷処を洗ひ其跡生栗子を嚼て咬処に敷貼てよし痛ミ強きハ麻油を紙の撚ニ塗て火を點し焔して薫てよし
又ハ人の乾糞を胡桃殻を剥て半片ニそめて

咬たる処に覆置て其の上より艾にて灸すべし
痛ざる迄に至て止
○痛強きハ童便にて洗て煎藥を用
凡人に咬たるハ又大に害となる物なり
病人ハ殊に害甚し若咬傷となバ速
薬治すべし

諸蟲咬傷 蛇ハ人纏たる症を附たり

蜈蚣咬傷 雞蛋を塗べし 黄白共ニ用ゆ

○又方 食蓼葉を揉て汁を咬處ニ塗てよし

○又方 毒甚しく痛腫ば人の糞を咬傷りたる

所へ塗べし ○又方 蛞蝓 圖説後ニありを取て傷處ニ

點てよし 蝸牛 圖説前ニありのを取て汁を咬處ニ滴入べし

るも亦よし ○又方 大蒜を嚼て傷處ニ塗

小蒜 圖下巻諸物入耳ニ出 亦可也 ○又方 塩を傷處ニ傳て愈

○又方蜘蛛を取て咬たる処に置ときハ蜘蛛自ら其毒を吮て痛立止

蠼螋咬人石灰を醋にてとき封ずべし

蜘蛛咬傷人の小便を傳てよし○又方油淀を塗べし○又方鹽と油とを和て敷べし○又方炮生姜を貼て吉○又方萆麻（図説金瘡もこ）を擣て汁を咬たる処に附てよし

蚝蟲刺人　伏龍肝（竈の下の焼土なり）水にてとき貼てよし

○赤かりて痛みハ馬齒莧図説後ニ見ゆをよく搗て封すべし

蜂蠆螫傷

蒼耳図説前ニ出を擣て貼べし○文方食茱萸の葉を擣て傷処ニ貼てよし○又方生芋を擦て封てよし芋梗も用ゆ○又方齒垽人の齒の垽あかなり螫たる所ニ塗てよし○又方蠟を蠋の蠟を咬たる處ニ附てよし○又方傷處を熱き湯ニ浸べし冷ハ數度取替浸すべし

○又方生蜀椒を嚼て螫たる處へ封て妙也生なきときハ乾たるもよし若實なきときハ葉をも用ゆ○又方青蒿下ニ図説の葉を揉て螫たる處に貼べし○又方塩を嚼て封べし○又方薄荷図説下巻ニ見撮口ニ出ス葉揉て封べし○又方鼈醋を地上に沃じ其泥をはれるてよし

蝮蛇囓傷急に柿漆渋柿搗てけと名之を塗べし若無ときハ乾柳串柳枝柳の類の肉刻醋に煮て塗べし鹹ハ柳の

蒂代末とかし ねりくひ ○又方に十屈菜 図説獣咬 桔
糊に和して塗もよし
梗葉 図説六 右二品共等分 擂爛 胡椒葉、店に末
一撮入て傳りてよし○又方急に烟管乃鴈頭
小き竹の截口代うつむけに傷處へ掩覆力極搭
またもよし
定りて放ちば暫時すれば肉膧起て鴈頭の肉
一揉に切るともいなり其処代小刀にて断割て
悪血を多絞出すべし又は急に鳥銃の火薬を
爛たる處の大さ程に盛置て火代點て火を發

すべし右は方便宜に任せ用ゆる後の人の熱
小便をもうけて瘡口を洗ふあと人糞を傳て
うへを布木綿にて巻き家に至りて酒にて人
糞は洗ひおとし左の方は用べし○爐中或は
竈は中の灰塊は熱湯の内に入れ和合再火の
上にかけて三四度沸其湯の内に傷ける処を漬に
べし初は熱きを覚ゆべし漸に熱きを覚へは
最早毒浅くなりたる也何程も甚ぬるに至

て止べし次に雄黄五靈脂二味共に等分（店にあり）を末となし馬齒莧（圖說下にあり）の絞汁にてとれ瘡口の處を除て四圍に塗て上を裹置べし○服藥ハ五靈脂雄黄等分末となし溫湯又ハ酒にて服すべし總て何れの藥を用ひるにも後にて酒を醉ほど飲べし凡山野を經歷する人ハ右の藥を購て帶行べし若右の二藥なくハ馬齒莧を莖葉共に搗て絞汁を三盃ほど飲べし亦妙也

蛇咬　常の蛇に咬たるハ鹽を嚼て傷處に敷其上へ艾にて灸を廿一壯すべし訖く復鹽を嚼傷の處へ塗べし若山野にて塩も艾も無ときハ火繩の火にても烟草の火にても傷の處へ押付て熱きを堪べし○又方明礬を用ゆべし薬店にあり生火にて溶咬たる處に流し入べし熱きを忍ばゞ立に愈○又烟管を火の上にて灸バ脂湧流るゝその脂り其脂の流を直に傷處へ滴掛べし其熱きを

忍て多灌にのくべし此方蝮蛇咬ゆも用てよし。
○又方蘿摩図説金瘡にあり搗て汁を取咬処に傅く
よし○又方蒲公英図説疔の條下にあり搗て傷處に貼
付し○又方杠板帰図説後に藤葉とし搗汁
を取り酒にて服し渣を傷所に搭て良○又方
蒜を食して酒を飲且蒜を搾爛て患処に塗て
其上へ灸すべし○又方金絲荷葉草図説下に搗
て汁を取り咬る處に附べし○又方小便にて

よく〳〵血(ち)を洗(あら)ひ其(その)あとへ齒垽(をくれ)をぬりてよし○

咬(かま)るゝあと瘡(きず)となりたるは熱酒(あつきさけ)にて頻洗(しきりにあらふ)べし

凡蛇(へび)に咬(かまれ)たる人水(みづ)にて手足(てあし)を洗(あらひ)或は川(かは)を渡(わた)るべからず一切醋物(すきもの)を食(くふ)ことなかれ若是(もしこれ)を犯(おか)せば瘥(いへ)ても復発(またおこる)す

蛇纏人身不解(へびひとのみにまとひつきてとけざる)ハ身を以(もつ)て側(よこ)に臥(ふさ)せ左右(さう)へ滾(ころ)ばし轉(まろべ)バ解(とく)るなり○又衆人(あまたのひと)一同(いちどう)に尿(いばり)をしかくれバ釋(とく)るなり熱湯(あつきゆ)を淋(そゝ)ぐるもよし

蠼螋に咬たるハ烏鶏の翎を焼て灰となし鶏子清に和匀て敷てよし

蚊豹脚嗜　蚊ハ夜出て人を嗜豹脚ハ晝出脚班なり　ハ刀豆人家園に栽く食料となすの葉を揉て其處に貼べし又樟腦を焔消二味ともに薬店にありを香油に和く傷所ぬ塗べし又熱湯に漬適し痛痒卽止

蟆子に嗜るハ蚊より毒つよし療法大抵蚊と同じ痛痒止ざるハ海蝦を鮓となし食て瘡

を發して愈

蚋に螫（蚊に似たる蟲なり）れて痛痒忍がたきハ手にて搔バ皮肉破てあしゝ塩を上に布て物に包ミ置ば即愈又螫るゝ時直に熱湯に洗バ立愈龍腦樟腦二味共に藥肆にあり能此毒を解何によらず此物の入たる煉藥類又ハ目藥様の物を塗てよし

蛭に吮るゝには塩を擦べし又田澤を渉る人ハ勿論山中にて梅雨の比杯蛭樹上より落て人

其叮するをり油に塩を和て手足頸に塗べし

蛭嗜む

蟲咬 何の虫と云をしらざれ

腫痛ハ姜汁にて其處を洗後に明礬雄黄 何れも薬店にあり の末を貼てよし○又方青黛雄黄 二味薬店にあり 其末水に調塗てよし○又方藍艾の葉を搗て汁を取塗てよし○又方ルウタ草に 図説下にあり の葉を揉て封べし最よし○又方款冬此葉 菜として食するものなり 揉て傳べし○又方蛇蛻皮 くちなハのきぬ に 野の邊に多し

くある物 二三文水に煮て咬処を度々洗べし
ちのり

桔梗 和名 きちかう ききやう

山野に有り春宿根より苗を生ズ高さ一二尺秋碧花を開く又白花のものあり単瓣千瓣の別あり蛇咬さるに用るハ何にてもよし

馬齒莧

和名 すべりひゆ 又 むまひゆ

此草園野ともにあり春苗を生し地に附て生じ葉青茎微赤惣体柔にして滑に澤あり六七月細なる花を開き尖る小實を結ぶ

蛞蝓

和名 なめくぢり

濕地に生ずる蟲なり蝸牛に似て殻なく行ときハ角を出す人家水甕の邊に最多し

青蒿

春苗を生じ冬枯葉極て細小なり六七月淡黄の細なる花を開き粟粒の様なる實を結其葉茎花實ともに其氣甚芬し此草能黄花蒿に似たり黄花蒿ハ青蒿より葉麁く胡蘿蔔に似て深秋に至りて色黄色になり青蒿ハ深秋までも葉の色青し

杠板歸
和名 いしみかハ
まゝこのしりぬぐひ
此草原野庭園共にあり四五月に
生し九月霜を見るときハ枯る
葉の形鉾のごとく
頭せとく
藤に小茨あり子ハ
圓く黒し睛のごとし味
酸し又細葉乃物あり
莖葉微く赤色を帯るもの
あり皆同物なれバ通し用へし
葉の背茨あり圖の
ごとし

金絲荷葉草

和名 ゆきのした

此草多くハ石鏬に生し冬に堪春の初めより苗長三四月に茎を出し小白花を開く花葉ともに状圖のごとし紅絲を引蔓る絲の末より苗を生ず人家にも盆に栽て玩ぶものなり

葉の背滑らかにして紅し

茎に毛あり

ルウダ草

此草ハ葉圓くして左右に刻あり秋の初に花さき色白くして細かなり秋の末に細なる実を結び冬枯て復宿根より春に至て苗を生ず俗に耆婆三礼草と言時疫行るゝ時門に掛置バ其災をも免るゝといふ

諸獸囓傷　毛ものゝかミやぶらるゝなり

牛馬囓傷ハ灰を熱湯中に入て傷處を漬すべし灰汁ハ盛置たる磁器を爐火の上にのせ置冷ざる様にすべし傷處爛たるハ三日許漬すべし若腫あらバ石ハ炙熱て熨に当し毎日兩度めして腫消て止○又方燭顆栗焼研て傅くべし○又方鶏冠血をぬり付傅てよし○又方白砂糖を封てよし

馬人の陰卵を嚙て脱とするハ急に推入烏鶏の肝圖説後にありを取細に剉く傷処に封せ包置外科に請て縫合すべし

家猪野猪に嚙たるハ松脂を火にて煉餅のごとくして傷處に貼べし

熊羆爪牙にて傷られ毒痛甚しきハ青布を燒て傷処を薫べし毒自然と出仍て葛根圖説吐血の條にありを濃煮て其汁にて洗且乾葛

根を末となし葛根の煮汁にて服すべし
毎日五次程服し夜ハ一次服すべし○又方
蔓青根乃絞汁を多服してよし○又方獨
顆栗燒研て傳べし○又方蒴藋 圖説前の擷撲ニ出ス
一大把許剉く水一升に漬し置須臾して汁を
飲且其滓を傷処に傳べし

鼠に咬たる
ハ先急ニ熖消を傷處に封付置
て火を点とれハ火を發し毒火ニ隨て散る

なり其後に麝香（薬店にあり）を内に傳て白躑躅の花或ハ千屈菜（二種共に図説後にあり）を煎じ服すべし多服るもよしされど若焔消なきときハ血を絞り出し或ハ熱き湯の中へ傷處を浸し或ハ牽牛葉（人家園庭に栽る蔓草なり）を揉て咬處に傳く後に右乃服薬を用べし〇又方黐（鳥を捕るもちなり）并釜臍墨をおしまぜて貼てよし

〇又方桐の木（木履に用る桐なり）を焼細末として糊

よわくなせ封べよし○又方牡蠣蚢殻の末なり菜店にあり石灰黄栢乃末三味等分にして蘩縷の汁あり

汁図説前の欄にくよく和てぬるへし擣しりなり

鼠に數品あり其中に毒最甚しきあり人若此鼠に咬るゝ時ハ傷處速に愈く當分無事なるも日かずを経て俄に大熱を発し赤き疹多く出傷寒のごとく煩渇し甚きは體中に紫黒乃班紋を見し狂躁極く死するもあり又ハ日ゝ午後寒熱を發し労証のごとくなるものあり又さ何故となく時ゝ寒暖にかゝり或ハ赤豆蕎麥等の物を食したる後に寒熱瘧のごとくなる事數年に至すざるものあり種々名状し難き証を見すもの也是鼠毒肉攻又ハ皮肉の間に在く患をな

其者にして皆咬まれたる初に療法を誤しより起る大抵膏薬に鉛粉等の品入あるハ貼置からバ傷處速に愈ぬれども毒外へ泄ざるゆゑ後に内攻して右様の大害をなすことあり愈たりとも禁忌を守ざらバ必再発して救がたし恐べく慎べし

猫に咬まれたるハ薄荷（図説小児の條にあり）を搗て汁を取り傷處に塗べし○又方蜀椒を剉ぐ水に浸し置き莽草葉（下に図説あり）を末となし右の蜀椒乃水にて調て咬處へ付べし○又方鶏冠雄黄（薬店にあり）を末となし水にて服し其上

に咬たる処へ塗べし○白躑躅圖説後にあり
花煎じ服すべし○白果食料になれども のなりいちやう
の木の實を搗爛して傷處に封べし

常犬に咬

れるハ砂糖を咬こる處へ塗てよし
○又方急に風の犯處なく傷処の血を嗍去
小便にて洗浄熱牛の屎を付てよし○蓖
麻子圖説急喉痺の條にあり五十粒殻を去水にて研膏乃
如くし先塩水にて咬れる處を洗次に右

此藥を敷貼てよし○又方白礬（薬店にあり）を末とかし咬たる処に摻て布にて裹べし○又方青柚子の青皮所ば擦く咬たる処に貼

極し猘兒の咬たるに最よし

舊瘡ある人狗涎瘡口に入るときは昏悶なして

に至る者あり急に蜀椒を浸したる水にて

莽艸（艸よあり）中國説は葉の末を調て塗てよし

瘈狗に囓れ

たるは急に瘡口より血を絞り出し

るときれハ瘡口の四圍を鍼にて刺血を多
く絞出し次ニ手ぬぐひをもれぬるバ肘の邊脚されし
ぬるゝバ膝頭より人ニ小便をしかけさすべし
おりく多く志うるをよしとす最其小
便瘡口の處へ流るゝ様ニして洗ふべし
其のちへ胡桃殻を二ツニ割肉を去て半
片の内へ 胡桃の殻なきときハ竹を輪ニ截て中へ人乃糞を填て其上へ灸すべし
人の糞を填満て傷所へうつむけニ掩ふせ

置其上へ艾葉を大く撚のごとく灸すべし其日百壮灸してよし艾炷大なる事胡桃殻ハ焼て焦き人糞ハ乾べし左のらハ幾度も取換く灸すべし灸の後杏仁（あんずの實中の仁なり薬店に在り）を擂く泥のごとくしべつたりと厚く塗封其表を布か木綿乃類にて厚く包て置べし扨瘡口より血水など流れ出るをよしとし翌日杏仁を去て又前のごとく灸して

後に膽礬（薬店にあり金物を腐す これに用ることあり）を末となし瘡口へ乾摻てはさみ置べし其後ハ毎日膽礬を酒にて洗ひおとして灸し灸して後又膽礬を傅置こと六七日にして血水出る間ハ灸すること毎日百壯宛すべし血水出止たる時灸を停て膽礬を洗去再最前のごとく杏仁を塗て置べし　婦人小兒膽礬しみて堪がたくハ始末ともに杏仁を傅てよし葱の白根搗爛して傅るもよしとぞ　○内藥ハ急に杏仁壹匁馬銭

五分（二味共に薬肆にあり）水二碗入一碗に煎じて頻に少しづゝ飲しむべし多く服すれバ煩悶しむことあり杈韮を搗絞く汁を取一杯づゝ五六日に一度ばかり服して佳し○又方防風升麻葛根甘草各三分杏仁壹匁五分○五味ともに薬店にあり水茶碗に二杯を一杯に煎服して最よし豺狼に囓たるも此方よし○又方馬銭壹匁水一茶鍾の内へ浸し置こと一時許して其浸したる水ばかり少しづゝ宛飲一日に飲盡すべし○又

方生姜汁鐵漿右二味等分にして冷る
まゝにて一合許づゝを飲べし○又方蝦蟆圖説
下巻呑針條にみえたり生にて両股を切皮を去洗淨膾となし
て柚橘の類にてしらふて多く喫べし○
又方羊躑躅圖説後の花煎じ服せ花なき時
ハ葉を用てよし
○山野の中にて右に用たる薬も人もなき時
ハ先自分の尿をかけ紙にて拭置小刀にて

と衝傷て血を絞りとし扨鐵炮の口藥を嚙傷たる創口の大に置て火縄にて火を點べし火發すれバ毒も亦發して家に歸く前方を用ゆべし

總て瘈狗に嚙れたる人嚴く禁忌を守べし其法毎日灸ある時風を避べし風瘡口より入まバ變じて急症となる慎べし扨左の食品を謹く喫べからず

赤小豆　蕎麥　此二品ハ三年の間食ふを忌べし　胡麻
麻人　索麪　芋　魚類川魚最忌べし
油煠の類　一切酢の物　青梅うけて
あさつ　右ハ百日の内食ふを忌べし　酒一年飲を忌べし　犬肉
終身食ふを忌べし

右法方何もなし凡此瘈狗傷ハ初よ理療を誤バ毒ぬけずして遂よ死するに至る良醫も療を施こしかたし又初の法ハ適と

いへども後に禁忌を守ざれバ再發して救ふ
べからざれバ恐べく慎べし僻邑山家なんど急に
良醫の來らざる時の為に理法始末の心
會を識せるなり
瘈狗に嚙傷ある人大に憎寒をなし大熱
を發し或ハ傷寒のごとく口噤牙を咬角弓
反張口涎沫を吐汗出睾丸縮大小便不通
舌巻食下らず或ハ狂犬の吠が如く聲を發

死せることを知れり故に理療法忽にすべからず

狂犬の形状ハ尾を垂下眼赤舌黒涎を流し舌を出喘おほくハ頭をかたむけ走るハ狂犬也

途中にて此に遇バ速に避逃し若避難き時ハ急に棒を操く犬の前脚を横に拂撃べし犬倒るゝ間に逃去べし或ハ犬の両眼の間を見すまして力を極く打べし犬立に死ぬ此を知べし

漫に打バ却て犬手元に廻り咬ことあり○凡常の犬も亦夏月炎天の節ハ口開く喘ことあれども舌の色黒からず且眼中も赤からず涎をも異なりとす

諸獣諸蟲に咬傷を痛極

勢危ものハ皆艾を以て咬傷たる處に灸すべし毒氣を抜散

しても安し或ハ大蒜一片を其処に布き上に
大艾炷みて二三壮灸してよし蒜爛ば取換
て灸すべし毒甚しきハ五十壮に至るべし

水虎又かハ川をとも云と相撲して人正氣を失て煩ふも
あり莽草の木圖説後にあり皮を剥くて末となし
水に拌呑しむべし佛前に供る抹香を服しむれば忽正氣に成て
本復す

鷄肝

鷄のきもなり

きもとハ是なり腹を割り開ハ直に見ゆ色黒紫にして状圖のごとし

莽草

和名　しきみ　四時ともに葉あり葉に光ありて厚し木は高さ六七尺より一丈許に至る花は紅にして杏の花は大さほどなく六出なり此邦の人抹香となし佛前に焚ものなり

実の状かくのごとし

千屈菜

和名 みそはぎ

此草世俗七月中元に先霊に水を祭るものなり本邦古人鼠尾艸と云しも是なり田野水傍に生ず高二三尺茎四角にして四稜あり葉柳の葉に似て短小なるもあり六月末より七月の末まで稍の間に紅紫花を開く

白躑躅

花園によし
三月開く色
白き者採用也
べし葉ハ桃に
似て四時凋まず
小木なり多く人家
園庭に栽

和名 しろつゝじ 俗にまうきうと云

羊躑躅

前の躑躅と同種類なくたゞ花乃色黄なり葉常の躑躅に比ぶれバ本細く末潤しつや無くして薄し又花赤きものあり

和名　とちはゝじ　むまつゝじ　れんげつゝじ　きつねつゝじ

廣惠濟急方中卷